『語学教育研究論叢』第 37 号

日本語教育に日本語文法研究を活かしていくには
―「として」を例に考えた試み―

幸田　佳子

Applying Japanese Grammar Research to Japanese Language Education:
A Case Study of the Usage of “Toshite”

KOUDA Yoshiko

Abstract

In teaching the grammar of the Japanese language, the results of research on grammar are used. However, they are not used directly but rather modified to meet the purpose of teaching Japanese. Since the purpose is to teach Japanese as a language, not all grammatical items and vocabulary information are systematically presented. Basic sentence forms are introduced to teach the sentence patterns. There is no problem if learners can use them properly, but in some cases they misuse them, which cannot be avoided simply by explaining the basic grammar. Teachers should be aware of these problems and examine grammar items specifically for their own purpose, along with utilizing the methods and the results of grammar research. In this paper, the Japanese word “toshite” is examined as such an example.

【キーワード】文法研究　日本語教育文法　複合助詞　産出レベル　理解レベル

1. はじめに

日常の教育現場で学習者の質問や誤用（作文や口頭表現）は、文法の問題が多い。教師は想定内のこともあるが、学習者の指摘によってそこが問題だと初めて気づかされることもある。おそらく、日本語の母語話者では予想もしないところで学習者が間違えてしまうからだろう。

教師は辞書、手引書、文法解説書で確かめておいて説明することになる。しかし、手引書や文法解説書を参考にしても、疑問に適切に答えられない場合がある。教育の文法は文法研究の成果を利用しながらも、どう覚えてもらうかを目的とした方法である。したがって教師は現場で活用できるが必要とする意味や用法の記述が十分でないため、調べながら内省して答えていくしかないのが現状である。

また日本語文法の研究からの分析を教師が見ることもあろうが、教師なりの答えを用意するにはかなり時間がかかってしまうことになる。文法研究は、意味分類を考察し、規則性や一般性を追究することを目的としているので、教育のための文法とは観点が違う。こういった状況の中で、現場の教育の文法に文法研究の成果や方法がもう少し活用できていれば、教師も学習者も双方が納得のいく形が得られるのではないかと考えている。

この論では、教育に文法研究で論じている成果をどのように活かしていけるのかを具体例「として」を挙げながら見ていきたい。「として」は中級レベルの表現だが、学習者には分かりにくく、教師にとっては定着させにくい文型の一つだからである[1]。

2 章で文法研究で分析している主要なテーマを簡単に見ていく。ここでは、文法内での複合助詞の位置づけ、意味用法の分類などである。そして、教育の文法では現場での教育の観点から様々な手法を挙げているので、それを考察する。文法研究と教育の相違を踏まえ、3 章では文法研究の手法であるコーパスからの分野傾向、用例からの規則性を見て教育に活かせるものを考察する。4 章では複合助詞「として」を具体的に教育に活かしていく形を考え、文法研究から教育へ活用できることを考えていく。

2. 先行研究

2-1　文法研究の先行研究　複合助詞

文法研究と日本語教育の文法の相違を「として」を通して見ていく。まず文法研究では、「として」のような語は連語として捉えられ、格助詞「と」または助動詞「たり」の連用形＋サ変動詞「す」連用形＋接続助詞「て」の組み合わせで一語のように扱っている[2]。「後置詞」「副助詞」「複合助詞」といった命名で定義づけして規則性を求めて制約している。

一方で「として」が動詞「とする」の連用形と考えられる例もある。

1）これが「平成最後の宝物」として、騒がれた。（作例）

また副詞の形もある。「ひょっとして」「ほっとして」「依然として」などである。

この論では「として」は一語の扱いで複合辞の中の複合助詞という考え方で進めていく。なお、例 1）の「とする」の連用形と「として」が区別しにくいところもあり、問題となるところは、3 章で触れていきたい。

連語全体の研究については、山崎・藤田（2001）が「複合辞」の用例を網羅して、まとめあげている。さらに、藤田（2006）は、複合辞の全体を通時的に考察し、その問題点を挙げている。砂川（1989）は複合助詞の存在をひとまとまりの一語として考え、その特徴と複合する意味を格助詞と区別している。松木（1989）は多くの用例から複合辞のカテゴリーの条件を挙げている。

そして、「として」については、馬（1997）が「資格・立場」の意味だけでは分かりづらいことから、用例を詳細に分析して用法を分類している。「文中の他の要素の資格をあらわす用法」と「判断主体化された立場をあらわす用法」と分けて、前者は「が・を・に・で」などの名詞句との共起、そして述部との共起を挙げている。後者は「としては、」などをあげている。

「文中の他の要素の資格をあらわす用法」［馬（1997）からの引用例文（p25）］
2）「（1）斎藤は巨投の柱としてチームをひっぱってきた。」
3）「（4）彼女を後任者として選んだ。」
4）「（15）彼は義務としてその金を返した。」
「判断主体化された立場をあらわす用法」［馬（1997）からの引用例文（p26）］
5）「（16）私としては、仕上げに 3 日かけたい。」

山崎・藤田（2001）は、馬（1997）と同様に「文中に現れる名詞句の位置づけになる場合と、述部の表す行為の位置づけ・意味づけになる場合」に分類している。さらに状態形容詞を述語とする文を加えて 3 種類としている。最初の 2 種類は同じなので、3 種類目の例を挙げる。

［山崎・藤田（2001）からの引用例文（p131）］
6）「（10）その態度は、かつての指導教官にたいするものとして、いささか失礼だ。」

他に「一つとして…ない」などの否定と呼応する副詞句を形成して、全否定の用法を挙げている。「としては」は「としても」と同類に扱い、「主題をあらわす一つの形」として別項目をたてている。

『現代日本語文法 2』（2009）では、複合助詞について格助詞の一種として位置づけ、「格助詞＋動詞のテ形 / 連用形」などのように形式が固定化して格助詞相当の機能を持ったものとして定義づけている。これが存在する意味は、述語との意味関係を明確

にして、格助詞では表せない意味を表すためとしている。「として」についてみると、格助詞の中では、「そのほかの格」に属し、その「役割」の中に「お礼に手紙を書く」のような「に」とともに「として」を分類している。「として」の説明は『主体・対象のさまざまな側面の中から一つの役割に着目し、それを取り出して述べる際に「として」が用いられる。』である。さらに「として」の前接の名詞が「事柄的な名詞」の場合は、出来事全体の位置づけになるという。前述までの研究と違い、細かい用法分類はしていない。総合的なまとめ方をしているので、「として」の位置づけは格助詞の中で「そのほかの格」になる。

以上、文法研究での研究の方法や分類の詳細、「として」の位置づけが分かった。

2-2　日本語教育の文法の先行研究　文型「として」

日本語教育の文法では、目的がその表現の運用になるため、わかりやすい導入例と具体的な場面に主眼を置いている。すなわち文型表現として文法項目を提示して意味と使い方の例、どのような状況で使われるのかなどを挙げている。教科書の手引書、文型辞典、解説書などそれぞれの用途に応じた形がとられている。

『みんなの日本語中級 1 教え方の手引き』（2010）を見ると、「として」の中心的な用法のみ文型項目としている。すなわち「資格・立場・観点」を表し、「として」の後ろにはそれに対する評価や役割の動作がくると説明している。

［『みんなの日本語』中級 1 から引用例（p193）］
7）「①会社の代表として、お客さんに新しい商品の説明をした。」
8）「②東京は、日本の首都として世界に知られている。」

「として」の前接は身分、立場から始め、抽象的な語に移るとよいとしている。用法による詳細な分類はせず、基本的な用法のみ提示している。さらに『みんなの日本語中級Ⅱ教え方の手引き』（2014）で、周辺的な意味の主題化の「としては」、本動詞の「～としている」「（たとえ）～としても」等、最後に副詞句の「（一つ）として～ない」の表現を文型項目にしている。文法研究の成果の中心部分を押さえ、積み上げながら中心から周辺まで広範囲に扱っている。

『日本語文型辞典』（1998）は文法項目の表現を文型とした辞典であり、例文を参考にしたり、分類を扱ったりするのに適している。「として」は「N として」「N としては」「N としても」「N としての N」「として…ない」の項目を立てている。さらに動詞「とする」を、「ほっとする」のような副詞的な語と本動詞「仮に…する」の意味に分類している。前者は「ほっとして」のように副詞の決まり句として扱えるが、後者の動詞「とする」が「として」になると、複合助詞との明確な線が引けないところ

が出てくるのがわかる[3]。また例文では、「としまして」「といたしまして」のような丁寧形も提示していて、解説を加えている。

次に庵・他（2008）の『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』は、文法研究を教育で実践的に使えることを目的にして、学習者・教師用の文法解説書として作られている。初級もハンドブックがあり、体系的に見ることができる。文法研究と同じ項目の立て方で編集していて、文型表現という語は使用していない。複合助詞を格助詞の分類に入れて、「として」はその下位分類「対象、手段、状況、その他」の 4 種類のうちの「その他」に入れている。さらに教育現場の問題となる「にとって」と比較して入れている。「として」は文法研究と同様の用法を 5 つに分類している。

［『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』より引用例（p44-45）］

一つ目は、「動作や状態の主体の（臨時的）資格や立場を表す」用法である。

9）「（3）大橋君は選手代表として宣誓を行った。」

二つ目は、『述語が「扱う、みなす」などのヲ格目的語に資格を与える意味を持つ動詞とともに用いられる』用法である。

10）「（4）A 国はその NGO の代表を国賓として丁重に扱った。」

三つ目は、『形容詞述語、名詞＋「だ」とともに用いられその状態の名目』を表す用法である。「で」置き換えられるという。

11）「（6）この地方は絹織物の産地として有名だ / 知られている。」

四つ目は、『「としては」の形で用い、述部に表す動作や状態に対して判断を行うた立場を個人的なものとして限定する』用法である。

12）「（10）自分としては間違ったことは言っていないと考えています。」

五つ目は、その他で、一語的な決まり句、副詞句などある。

13）「（18）田中は家族のことを一言として話さない。」

14）「（19）大学の体質は依然として変わらない。」

『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2008）は文法研究の立場で体系立てて編集し、「として」の位置づけと用法分類を整理している。一方で、教育文法の観点も取り入れ、「にとって」との違いを扱っている。

鈴木（2006）も文法研究での分類を整理して、分類ごとの文の種類や前接する名詞句の特徴を示している。さらに中級以降で導入する順番を中心的な意味から周辺へ提示していて、より実践的である。6 種類に分類しているが、すべて理解し、産出できることを念頭に置いているようである[4]。

市川（2017）の『中級日本語文法と教え方のポイント』では、教育現場から出る疑問に答える形でより実践的に解決できる方法を示している。分類は示しておらず、基

本的な意味と用例を説明している。「として」は「にとって」「(にしては)」と同項目にして比較している。「学習者はどこが難しいか。よく出る質問」の要点と誤用例を提示している。「いつ使われるのか」と運用場面（会話と文章の中で）も示して、より具体的で実践的といえる。「として」をどう使用すればよいのか悩む教師側からの視点で記述されている。

先行研究での文法研究と教育の文法の違いを見ると、文法研究は語の意味や特徴など追究するため、どのカテゴリーに所属し、さらに下位の中でどう分類できるかなど条件や制限を分析していることがわかる。一方で教育の文法は、学習者にとって習得しやすい形や意味で運用できるようにすることが目的なので、文法研究からの活用は基本的な中心部分の意味と用法である。教師も基本的な意味でとどまり、体系的には整理できていないのが現状といえる。それを補う形で『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2008）がある。名詞句の種類や述語の種類、類似表現「にとって」などとの相違等も載せている。しかしどう運用できるかまでは載せていない。

「として」の一般的な見方は、文法研究では複合助詞のその他になり、主要な扱いではないが、教育文法では誤用などの多さから「その他」的な扱いにしていないことだ。

次に文法研究の用例からの傾向を見て、その特徴を把握しておきたい。頻繁に出る例や文章の種類を出して、典型例を見ておく。

3. コーパスと用例からの傾向

この章ではコーパスから数量的な傾向を探り、どの程度、どの分野に多く使用されているのかを見る。そして新聞からの用例で具体的な形の現れ方を考察していきたい。

3-1 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から見る傾向

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の少納言から 500 例[5]を取り出し、傾向をみた。図 1 のグラフから、1. 社会科学（102 例）、2. 文学（81 例）、3. 白書（39 例）、4. 国会会議録（36 例）という傾向が出て、「として」は社会科学分野の文章に多いことがわかる[6]。

また、図 2 より単純な分類ではあるが、500 例を複合助詞、動詞「～とする」の形、副詞（「平然として」のような形）の 3 種類に分けた。結果は、複合助詞 374 例、「～とする」73 例、副詞 54 例であった。全体の中で複合助詞が 2/3（74.2%）を占めている。

さらに各々のメディアジャンルで 3 種類の文法項目がどのくらい現れているのかをグラフと数値で表した。複合助詞では、1. 社会科学分野 82 例　2. 文学 48 例　3. 白書と国会会議録　各々32 例である。ちなみに、動詞「～とする」や副詞「として」は

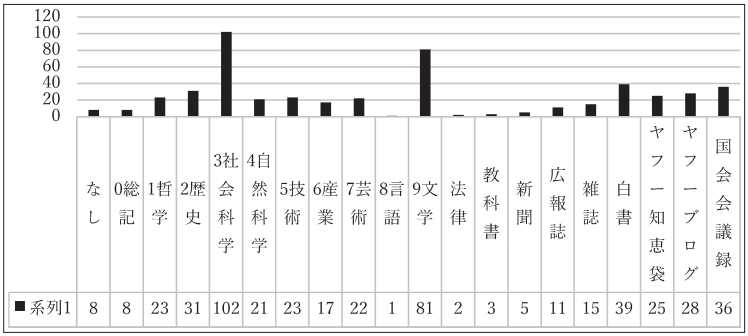

図 1　500 例メディアジャンル

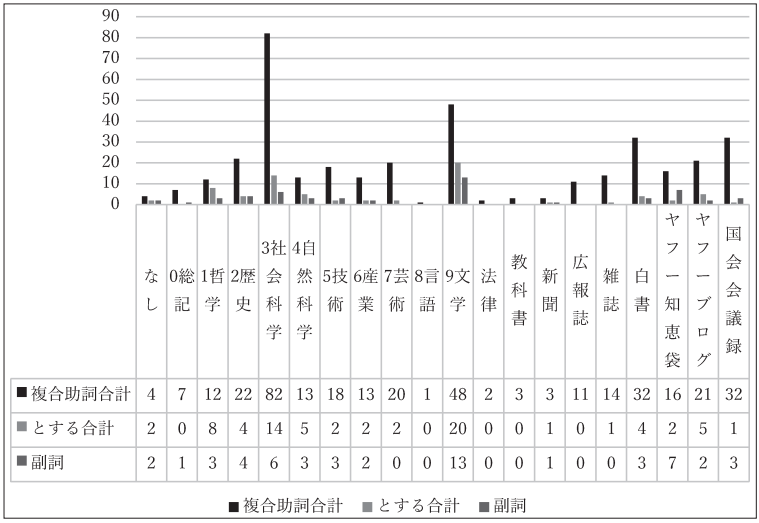

図 2　ジャンル別文法項目数

文学において最も多く出現している。

コーパス 500 例という限られた資料の中での傾向ではあるが、文章の中で、「として」は複合助詞が多い。そして、ジャンル別では社会科学の分野に 82 例（22％）と最も多く使用されていることが分かった。

複合助詞の例からどの格との共起が多いかを単純な分類であるが、見てみたところ、ガ格 196 例（52%）、ヲ格 106 例（28%）、その他 72 例（20%）である。ガ格とヲ格で 80% を占めている。

以上コーパスからの傾向は、文章の中で「として」は複合助詞がより多く現れる。分野は社会科学と文学が多い。次に白書と国会会議録である。そしてガ格とヲ格の用

法で 8 割を占めていることが分かった。

3-2　用例からの分析

新聞には様々な分野の記事や解説、コラム、エッセイ、小説、意見など種々の文章の種類があるので、そこから用例を抜き出し、気づいたことや問題になることを取り出していく。結果からいうと、コーパス同様、ガ格、ヲ格名詞の役割や立場を示す「として」が多い傾向にあった。用例 63 例から、ガ格 33 例、ヲ格 13 例、述語 3 例で全体の 77% であった。他に「としての」6 例、「としても」5 例、「としては」2 例であった。用法により次のような形に分類した。「として」はガ格、ヲ格、述語、の 3 種類、「としての」「としては、」「としても」で計 6 種類とした。

ガ格とヲ格は、集団の中での立場や資格、動作主にとっての見方などで、行動、状態を表現している例である。（波線、傍線は筆者加筆）

15）（1992 年）そこからの 4 連覇など計 5 度の優勝すべてにかかわったのが、渡辺康幸・住友電工監督だ。エースとして、母校の監督として優勝を果たした伊勢路の思い出をふりかえってもらった。
（2018/3/27 朝日スポーツ「全日本大学駅伝 W の衝撃」）

16）アイボに会って 1 時間たつと、「モノ」としてのロボットでなく、「イヌ」として接していました。
（2018/9/1 朝日「北欧女子オーサの日本探検　AI どこまで進化」）

述語の場合は、述語に具体的な内容が来ている。

17）また気象庁は市町村の防災対策に気象予報士を活用する試みを開始。16 年度にモデル事業として新潟県三条市など全国 6 市に気象予報士を 6 人派遣した。
（2018/9/3 朝日夕刊）

「としての」は連体修飾句となり、後ろの名詞の特徴を述べている。「として」がなくても表現できるが、「として」を入れることで「文化と情報の発信地」という立場を強調して表している。

18）今年 1 月、洗練と華やぎを感じさせる並木通りに開業した「ハイアットセントリック銀座東京」。かつては夏目漱石ら明治の文豪が勤めていた朝日新聞社の社屋があったことから、活字文字や印刷機を模したアートワークを随所に取り入れ、文化と情報の発信地としての銀座の歴史を想起させます。
（2018/3/20 朝日　広告　ハイアットセントリック銀座　東京）

「としては」は「として」に「は」のついた形で、19）のように比較し、強調している例である。さらに 20）は「としては」で一語的になり、人や組織の立場から言えばという、主題化した表現となる。

19）「毎日読みたい 365 日の広告コピー」は、フェイスブックでその存在を知った本だ。兵庫明石市に本拠を置く出版社「ライツ社」が発刊、3 か月で 5 刷 2 万 5 千部に達しているというこの種の本としてはすごい部数だ。
（2018/3/16 朝日　「経済気象台」）

20）釣り好きの記者としては、無料で入れる浦安市郷土博物館をお勧めしたい。2001 年に開館し、海とのかかわりが深かった暮らしを再現している。
（2018/3/28　朝日「わがまちお宝館」　浦安市郷土博物館）

「としても」は「として」に「も」のついた形で、21）のように社員とその配偶者同様に、会社もという意味で「も」がついている。22）は「も」の列挙の用法で一語的になっている。

21）5 年ほど前から配偶者同伴の復職セミナーの講師を務めていて、企業からの依頼は年を追うごとに増えています。会社としても、社員の配偶者に家事や育児にかかわってもらうことで、優秀な人材に 1 日でも早くフルタイムで働いてほしいのでしょう。
（2018/4/2　朝日　生活「育休復帰セミナー　配偶者と」）

22）未来はどうなるのか。これは常に人間の心を領している問題である他の生物は個体としても種としても、そんなことは考えない。
（2018/7/9 朝日夕刊　池澤夏樹「終わりと始まり」）

用例の傾向から文章の種類に何か共通するものがあるのだろうか。コーパスからは社会科学分野に多く現れているが、新聞は、解説文に多い。事件や出来事などの記事やスポーツ欄等には出現していない。むしろ、事件後の解説やコメント、コラムなどに用いられている。

また「として」の前に来る名詞は社会的な役割や職業、一般的な総称などが多い。事柄的な語彙も名づけ的、定義づけ的な名詞で出現する傾向がある。「エース」「監督」「『イヌ』」「文化と情報の発信地」など。

用例から、複合助詞か動詞かの判断に迷う例があった。もともと、複合助詞として判断するのは「として」の前接が一語的な名詞かどうかである。「～とする」は連体修飾句や引用句になる。しかしこの句が一語とみなされる場合、命名的なもの、引用

的なものと考えられ、どちらかで迷う例がある。

23）森友学園との国有地取引に関する財務省の公文書が書き替えられた疑いをめぐり、同省は6日、参院予算委員会の理事会に「文書を直ちに確認できない」などと報告した。野党は「ゼロ回答」として一斉に反発し、国会審議は混乱
（2018/3/7 朝日）

24）大阪市の本店で臨時会見した岩根茂樹社長は被害規模を台風では「平成最大」とし、「大部分は3日程度で復旧したい」と述べた。
（2018/9/5　朝日「関空孤立　5000人脱出へ）

新聞の用例の場合、『日本語文型辞典』（1998）にある「～とする」の引用や伝聞の意味に相当する例が多く出現している。23）や24）の例は、その引用句とも言えるが、命名的な名詞ともいえるだろう。名詞接続の「として」の形であれば、複合助詞と考える。2例とも類似しているが、23）は「として」で24）は「とし、」であるため前者は複合助詞、後者は動詞とした。このことから複合助詞は、動詞の用法を持ちながら助詞の機能をはたしているということが分かる。次の例も同様である。

25）官邸幹部によると、米側から「首相と電話で話したい」と連絡があったのは9日未明。協議で、首相はトランプ氏から「グッドニュース（朗報）だ」と米朝首脳会談の実施を決定事項として初めて伝えられた。
（2018/3/10 朝日「日本外し」に警戒感）

この例は報道独特の表現と考えれば動詞ともいえるが、「名詞＋として」の形と考え、複合助詞とした。「AをBとして」文型で「みなす、扱う」のような動詞が含まれた意味になっている。

実際の用例の中では、ガ格とヲ格の共起の複合助詞「として」が多い。また出現する文章の種類は客観的な立場に立って観る解説や意見などであった。なぜ解説や意見に多く出現するのだろうか。理由は格助詞「で」や「に」では表しきれない部分を表しているからだろう。その部分は人やもの、事柄の立場・資格・役割といった語彙を取り出して強調することである。さらには具体的で命名的な語彙、定義的な語彙なども含まれる。こういった強調の仕方は、話者の動作や状態、ものや事柄に対する見方などを客観的に捉えていて、メタ認知的な表現になっている。そして事件や現象そのものを描写するのではなく、特徴や資質などを捉えての表現にしていると考えられる。

4. 日本語教育からの視点に立つ意味・用法

4-1　文法研究の整理と教育文法の観点

教育現場からの観点で文法研究をどう活用したらよいのだろうか。まず、文法研究の要点を整理してみた。

①「として」をひとまとまりの複合助詞と考え、動詞の連用形「～とし（て）」は考慮しないこととする。動詞の「～とする」は別文型とする。

② 先行研究では、意味で分類しているのではなく、文の中の格との共起から分類していることがわかる。主なものは、主格、対象格、述語全体という分類である。

③ コーパスから、文章の中で「として」は複合助詞がより多くあらわれる。分野は社会科学と文学が多い。次に白書と国会会議録である。ガ格とヲ格の用法で 80% を占めていることが分かった。

④ 用例から、文型はガ格とヲ格共起の文が 70% 以上と多い。そして文章の種類は意見文（解説、分析）に多く出現していることも分かった。役割や資格を強調した表現であることも分かった

次に教育文法の観点を見ていく。学習者が習ったことをすべてを産出できるようになることは不可能であるので、まず基本を産出できるようにすることだ。

庵（2016）は、日本語教育においての文法や語彙は意味が分かればいいものと意味を理解し産出できるもの分けていく必要があるという。そして「産出レベル」の文法項目の方に重きを置いている。この「産出レベル」は文型表現でいうなら基本的な中心部分になる。一方で意味が分かればいいものは「理解レベル」になる。どこでその線を引くかは、学習者の理解度や誤用なども配慮することとなる。この「産出レベル」と「理解レベル」に分けての考え方は重要だと思われる。この観点に立ち、日本語教育で教える文法を考察してみる。

4-2　日本語教育への活用

日本語教育の文法への活用の一つ目は、一語の複合助詞とすることである。助詞として認識してもらう。「名詞 + として」の形が基本である。

二つ目は、基本的な用法を明確にすることである。コーパスと用例の傾向からガ格とヲ格の用法が 7 割以上を占めているので、学習者が読解などで理解しなければならないだろう。またこの用法は基本的な用法になるので、作文や口頭表現などでも運用できた方がよいと考えられる。庵（2016）の「産出レベル」に当たると言える。一方、述語共起の用法と「としての」「としては」「としても」は用例では 3 割ぐらいなので、学習者の必要に応じて提示する。庵（2016）の「理解レベル」に当たると言える。

三つ目は、提示する例文は、通常は話者視点の日常生活の表現例が多いが、コーパスと用例からの出現傾向の多い社会科学分野の文をわかりやすい形にして提示してい

くことである。同時に語彙も使用頻度の高いものを示す。

実際の指導では、「として」の前接する名詞語彙を強調して表現するので、ここに視点を当てるような例をいくつか提示するとわかりやすくなるのではないだろうか。そして、「として」の後ろに来る述語の動詞や形容詞などの特徴を挙げておく。

26）田中はクラス代表としてスピーチをした。（作例）

26）の「クラス代表として」の名詞句から述語に来る動作や状態の表現は制限できる。クラス代表で行うことは、みんなの前で「話す、走る、読む、働く、行うなど」または状態から「指名される、知られている」等がくるだろう。市川（2015）は定着させるには述語に来る語彙の制限をして指導した方がよいと述べている。

最後に、ガ格とヲ格構文、語彙の種類を挙げておく。産出できることを目的とする。

①ガ格　N1 が N2 として V／A

N1：人や生き物　物や事柄

N2：役割、職業、立場など　リーダー、教師、医者、親、家族等

一般的、総称な名詞（野菜、道具、観光地など）

V：動作動詞　（行う、働く、こなすなど）

受身形、自動詞、形容詞（知られている、有名だ、使われるなど）

27）私は家族代表として式に参列している。（作例）

28）「タピる」のように流行の名詞に「る」をつけて、動詞として使われる。（作例）

29）大洗はアニメの「聖地」として知られている。（作例）

②ヲ格　N1 が N2 を N3 として V

N1 と N2：ひとや生き物、もの、ことがら

N3：役割、見かた、命名的な語、定義的な語

V：伝える、定める、考える、みなす、とらえる、扱う等の動詞

30）私たちはこの公園を防災の避難場所として決めた。（作例）

31）山田さんはアニメのキャラクターを友達として見ている。（作例）

32）節分の日にイワシを厄除けとして食べる習慣がある。（作例）

述語共起の用法、「としての」「としては」「としても」の項目は学習者の必要に応

じて提示し、読解などで理解できるようにしたい。

5. 今後の課題

日本語教育では文法項目を文型として規則や文の形を提示している。この形が文法研究の複合辞の意味用法の分析を深めるのに役立っていると藤田（2006）は述べている。これは複合辞の意味用法の分析だけでなく、文法全般において言えることだろう。文法研究を整理して教育の文法で教えても、学習者が理解できなかったり、誤用したりするところは多々ある。そういった規則や文の形、語彙などは精査することで、認識の差も含めて文法研究にも影響を与えているのではないだろうか。

しかし現場の教師にとって文法研究を読んで整理するという、煩雑で時間のかかることをするのは容易ではない。文法解説書がこうであると書かれた結果を信じて教え方の工夫を凝らす方に時間を割いているのが常で、文法の特徴や規則を調べたりすることに重きはおかない。だからこそ、気になる語彙や文型は少しずつ集めておき、時間をかけて調べていくのがよいのではないだろうか[7]。

また、調べ上げた項目を学習者にすべて提示してしまうことがあるが、学習者の理解と必要性に応じて変えた方がよい。この点については、さらに整理していくことが今後の課題である。

「として」は、中級レベルで「にとって」などと共に学習者が間違えやすい表現の筆頭である[8]。また教師の側も母語話者視点のみでとらえているため、提示しにくい表現なのである。そのような複合助詞などの連語は多くあるので、これからもこういった語について集めていき、考察を深めていきたい。

注

[1]「として」を習得後、産出したが、文脈から見て使用しない方がいい例

(i)（日本人のファストフードの利用を挙げた後に）私の場合は、学生として、ファストフードの利用は頻繁だ。（中国留学生）

(ii) 中華の主食はライスや麺などが普通であるが、洋食はパンやジャガイモが普通である。中国人としてやはりライスが一番の大好物である。（台湾留学生）

(i)の場合は、言いたいことは「留学生で、食事より勉強が大事だから」という理由ニュアンスの意味が入る。理由表現を使用した方がいい。ここでなぜ「として」が使えないのかといったときに、どう答えたらいいだろうか。

(ii)の場合、前文で主食を取り上げているが、「中華を食べる中国人は当然ライスである」の意味になる。または「中国人にとってライスが一番なのである」「中国人」を強調したいのだと思うが、「として」はその立場の動作を表現するものである。

「として」の意味だけでなく、後述の述語をしっかり提示しないといけない。

[2]『日本国語大辞典第二版』によると、動詞の原義を強くとどめる場合と格助詞のように用い

る場合があるという。古典の例文から通時的に見てきて現代では格助詞と同様な扱いであるとしている。

[3]『日本語文型辞典』の項目【とする 2】内の〈見なし〉「ニュース報道や法律の文など、かたい表現に用いられる。」（p341）では、以下の例からも迷う例である。

「(2) 多額の不正融資が行われた証拠があるにもかかわらず、事実無根として片づけられた。」

[4] 鈴木（2006）は、6 つのタイプと提示順序を挙げている。（引用例文 p5）

「①基本的用法（中級前期）

a. 動詞文タイプ　・私は留学生として日本に来た。

・日本人は米を主食として食べている。

b. 判断・評価文タイプ　・京都は日本の古い町として有名だ。

②特殊な用法（中級後期）・努力するのは人間として当然のことだ。

③応用事項（上級～）　・会員は義務として会費を納めなければならない。

・政府として、対策を考えたい。」

[5]「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言より 500 例のうち 7 例は「落として」のように音節だけが同じものの例である。493 例になるが、一例の中に二つの「として」がある場合があり、それを含めて数えると 501 例になった。約 500 例と少ないが、ある程度の傾向は把握できるだろう。

[6] 社会科学分野の主な種類は、法律、政治、社会、教育などの解説、論説、意見文である。例えば、『刑事司法を考える』（下村幸雄著 1992、勁草書房）

[7] 菊池（2019）は教科書や手引書等正しくないこともある、自分で調べておく必要があるということを述べていて、教師なりの考察と整理が必要だと思われる。

[8] 母語話者（教師側）は、「にとって」と「として」文型や意味も違うので、何が問題になるのか気づきにくい。しかし、学習者から見ると、類似表現と感じ、わかりづらい。ましてや、同じ文でどちらも可能な場合、意味が違うことを理解するのは難しい。［市川（2015）の引用問題（p14-15）］

(iii)「(9) 人｛として／にとって｝大切なことは何か。」

(iv)「(10) 広島の原爆は日本人｛として／にとって｝忘れられない出来事だ。」

(v)「(11) 医療費値上げは老人｛として／にとって｝大変な問題だと思う。」

「として」はどの例も倫理的、道義的な意味合いで取り上げている。述語は状態的な名詞文だが、本来は動作的な文の方が適している。例えば(iii)は「迷惑をかけないことだ」(iv)は「忘れてはいけない（ことだ）」、(v)は「許せない」である。

「にとって」は取り上げた人たちの評価や価値判断を表している。この述語が、動作的な語彙になるため、どちらも可能だが、「にとって」の方がわかりやすいだろう。典型的な文と語彙の制限をした指導法がよいと述べている。

参考文献

(1) 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2008）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
(2) 庵功雄（2016）「日本語教育において必要な文法研究とは何か」レジュメ　公開シンポジウム「現場の疑問と研究をつなぐ」日本女子大学 2016 年 12 月 24 日
(3) 市川保子（2015）『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
(4) 菊池康人（2019）『よりよい授業につなげる教師の「文法力」―知識とセンスとスキルを高める―』レジュメ　長沼スクール東京日本語学校（日本語教師夏季集中セミナー）2019 年 8 月 12 日
(5) 鈴木智美（2006）『複合助詞「として」の意味・用法再考―日本語研究と日本語教育研究からの包括的記述の試みの一事例として―』https://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu7_folder/symposium/pdf/4/01.　pdf　2018/8/17 参照
(6) 砂川有里子（1987）「複合助詞について」『日本語教育 62 号』日本語教育学会 42-55.
(7) 日本語記述文法研究会編（2009）「第 2 章　さまざまな格」『現代日本語文法 2　第 3 部　格と構文』くろしお出版 3-100.
(8) 藤田保幸（2006）「複合辞研究の展開と問題点」藤田保幸・山崎誠編著『複合辞研究の現在』和泉書院 3-19.
(9) 馬小兵（1997）『複合助詞「として」の諸用法』『日本語と日本文学』第 24 号　筑波大学国語国文学会 22-31.
(10) 森田良行・松木正恵（1993）『日本語表現文型』（NAFL 選書 5）アルク
(11) 山崎誠・藤田保幸（2001）『現代複合辞用例集』国立国語研究所
(12) グループ・ジャマシイ編著（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
(13)『日本国語大辞典第二版　第九巻』（2012）小学館
(14) KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言　2019/1/14 参照
(15) スリーエーネットワーク編著（2010）『みんなの日本語中級Ⅰ教え方の手引き』スリーエーネットワーク
(16) スリーエーネットワーク編著（2014）『みんなの日本語中級Ⅱ教え方の手引き』スリーエーネットワーク

用例出典

朝日新聞　11 例　2018/3/27 スポーツ「全日本大学駅伝 W の衝撃」、2018/9/1「北欧女子オーサの日本探検　AI どこまで進化」、2018/9/3 夕刊、2018/3/20 広告「ハイアットセントリック銀座東京」、2018/3/16「経済気象台」、2018/3/28「わがまちお宝館」浦安市郷土博物館、2018/4/2 生活「育休復帰セミナー　配偶者と」、2018/7/9 夕刊　池澤夏樹「終わりと始まり」、2018/3/7、2018/9/5「関空孤立　5000 人脱出へ」、2018/3/10『「日本外し」に警戒感』